学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	竹田　恵子【論文博士】（比較社会文化学専攻 平成25年3月単位修得退学）
論 文 題 目	《S/N》（1994）における古橋悌二
審 査 委 員	（主査）　教　授　　永　原　恵　三
	准教授　　中　村　美奈子
	教　授　　棚　橋　　訓
	准教授　　戸　谷　陽　子
	横浜国立大学教授　　小　野　康　男
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　否　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む ㋑．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※　本学学位規則第２４条第４項に基づく学位論文全文のインターネット公表について

要　　旨

本論文は、京都において 1990 年代に活躍した「ダムタイプ dumb type」というアーティスト集団によって制作されたパフォーマンス《S/N》(1994)を対象作品として中心に取り上げ、また、その作品制作において中心的な役割を演じていた古橋悌二(1960-1995)については、そのパフォーマンスの中だけでなく、その制作のプロセスも含めて、《S/N》との関わりを、多面的な視点から明らかにするものである。古橋悌二は自ら HIV/AIDS に感染し、1995 年のサンパウロでの公演中に亡くなっている。この論文では、HIV/AIDS と正面から向き合い、マイノリティとしてのゲイや HIV/AIDS 感染者が自らを「カミングアウト」するという社会の軋轢の中でのアイデンティティの表出を、《S/N》というパフォーマンスとしての「アート」において、その有効性を検証し、作品構造の分析という美学的な方法と、ダム･タイプのメンバーへのインタビューをはじめとする何年にもわたるフィールドワーク、そして創作時の社会的文脈を雑誌や新聞記事などのメディア関連資料を用いて、その多面的な作品の姿を明らかにしている。

論文の特に美学的な側面としては、第 3 章の引用を多用することで作品を構築すること、第 4 章で「カミングアウト」の仕掛け、第 5 章と第 6 章での古橋悌二自身の「テクスト性」、「作者性」となどについて、ミシェル･フーコーやポーラ･トライクラーなどの議論、共演者であったブブ・ド・ラ・マドレーヌなどの証言を交えて、同時代の思想的背景に配慮しながら、作品の位置づけを検証していたと言えよう。

審査委員会は 2 回開かれ、1 回目では、思想的な背景に対するより正確な記述や分析の精度、述語の規定などに曖昧さとブレが見られ、用語の不統一さや誤字脱字の多さが指摘された。それらの指摘に対して、申請者は丁寧に修正を加え、さらに不明な箇所については加筆するなどして、いっそう豊かな内容の論文となった。2 回目では最終的にやはり誤植などが残ることから、文献表を含めて徹底的な校正をすることが求められた。公開発表では、この作品の持つ美的と政治的両面のバランスが、まさにシグナルとしての S/N として機能している点などが議論され、申請者は的確な応答をした。また、最終試験において、語学力についても確認され一定の水準に達していることが確認された。

以上から、本論文は本学における学位論文として十分な水準にあることを審査員全員一致で確認し、博士(学術)、Ph.D. in Sociology and Performance Studies の学位に相応しいと判断した。